

A study of relationship between sports injuries and psychological  
competitive ability in the university soccer players

1K07B091-9

齋藤 雄弥

指導教員 主査 堀野博幸 先生

副査 広瀬統一 先生

【目的】

スポーツをおこなう選手にとって、怪我はつきものである。そしてスポーツにおける競技場面で、選手が良いパフォーマンスを発揮するためには、生理的・身体的な要素とともに心理的な要素も大きく影響を及ぼすことがわかっている。しかし、スポーツ傷害とスポーツ選手の不安や気分といった一般的な心理的特性に着目した研究は数多く行われているものの、スポーツの競技場面における心理的特性との関連性に焦点を当てた研究は未だ少数である。よって本研究は、男子大学サッカー選手において、これまでのスポーツ傷害既往歴、現在の怪我の状態、さらにこれまでに所属したチームにおけるメディカルサポートの有無という3要因と、心理的競技能力との関係性を明らかにすることを目的とする。

【方法】

本研究は、関東大学サッカー連盟に所属し、2010年度関東大学サッカーリーグ1部の早稲田大学ア式蹴球部74名と、同2部の東京学芸大学蹴球部60名の男子選手、計134名に対して、2010年9月にアンケートによる調査を実施し、作成した無記名方式によるアンケートと心理的競技能力診断検査(DIPCA.3)を使用してデータの収集をおこなった。

【結果】

スポーツ外傷・障害問診票での回答をもとに対象者を3つの群に分類し、過去から現在に至る競技生活の中で、全くスポーツ障害の無かった者をA群(12名)、スポーツ傷害を受傷したものの現在は完治している者をB(77名)、スポーツ傷害を受傷し現在も治療中の者をC群(39名)とした。分析した結果、予測力の尺度で有意差が認められた。しかし、各群間では有意差は認められなかった。第二に、現在のプレー状態をもとに、選手を3つの群に分類した。現在スポーツ傷害を抱えることなくプレーしている者をa群(87名)、現在スポーツ傷害を抱えながらもプレーしている者をb群(25名)、現在スポーツ傷害を受傷しており、練習や試合から離脱している者をc群(16名)とした。分

析した結果、予測力と判断力においてb群がa群よりも有意に高かった。またその他において有意差は認められなかった。更に作戦能力因子でもb群はa群に比べ有意に高かった。次に、小学生から高校生に至るまで、所属したチームにトレーナーやチームドクターなどのメディカルスタッフがいたチームに属する者(95名)をサポート群とし、メディカルスタッフがいなかった者(33名)を非サポート群として分類した。分析の結果、サポート群が非サポート群に比べ、リラックス能力、自信、予測力、判断力が有意に高かった。また、自信因子と作戦能力因子も同じく有意に高く、サポート群は非サポート群に比べ、全体的に心理的競技能力が高いといえる。

【考察】

本研究では、スポーツ傷害を抱えながらプレーしている選手は、抱えていない選手よりも、予測力、判断力が優れているということが認められた。しかし、これは単に怪我をしていることが能力の向上につながっていると考えることもできるが、逆に新たな怪我への恐怖心から、素早いプレーを心掛けていることの表れではないかとも推測される。また、青少年期におけるメディカルサポートの充実は、選手にリラックス感やプレーすることへの自信を与え、冷静な判断や予測ができるようになることで、客観的な視点を持った選手が多い傾向があることが分かった。特に成長期においてはオスグット病や腰椎分離症などスポーツ障害が発生しやすく、その時期におけるメディカルサポートは選手の傷害予防にも気分けて重要な役割を果たすと考える。本研究は大学生サッカー選手を対象としたが、競技別、競技歴別、男女別など、様々な視点からも研究をおこなうことでさらにスポーツ傷害と心理的競技能力との関係性が明らかになるのではないかと考える。これからも、スポーツ選手の競技場面における心理状態を全面的に理解することを促進してゆくためにも、様々な視点から選手の心理状態を紐解いてゆき、ベストパフォーマンスの発揮のためのコーチングにつながる研究がなされることを望む。